

機関番号：34505

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520071

研究課題名（和文） 米軍占領下の琉球列島におけるキリスト教交流史の研究

研究課題名（英文） The Study of the History of Trans-regional Contacts of Christianity in the Ryukyu Islands under Occupation by the U. S. Armed Forces

研究代表者

一色 哲 (ISSHIKI AKI)

甲子園大学・人文学部・准教授

研究者番号：70299056

研究成果の概要（和文）：本研究によって従来史料的制約から空白になっていた1940年代後半の沖縄での沖縄キリスト聯盟等のキリスト者の諸活動の実態がほぼ解明された。また、米軍占領下で行われた琉球王国末期の宣教師・ベッテルハイムに対する記念行事の研究や宮古・八重山のキリスト教受容の比較研究(交流史的研究)をきっかけに、琉球列島での近代以降、戦前・戦中のキリスト教史を戦後の米軍占領下の歴史に連結するという新たな展開が展望された。

研究成果の概要（英文）：In this study, I solved most of the Christian actual situation in Okinawa of the late 1940s. The history of Christianity of this time was a blank until now. I overcame that by collecting new historical documents. And, this study is the first one that clarified history of Christianity in Miyako and Yaeyama. By methodology called the History of Trans-regional Contacts of Christianity, relationship of the missionary work in Okinawa, Miyako and Yaeyama became clear. In addition, I proved that Christianity of the whole Ryukyu Islands changed by the trans-regional contacts between Japanese mainland, Taiwan and the United States.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：沖縄・日本キリスト教史、文化交流史

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：キリスト教交流史、沖縄キリスト聯盟、仲里朝章、宮古キリスト教会、國仲寛一、八重山基督教会、崎山信邦、ベッテルハイム

1. 研究開始当初の背景

報告者はこれ以前に2度類似の研究で科学研究費助成金を受けている(①「米国占領下沖縄の地域形成と国家のくびき—キリスト教ネットワークを結節環として—」(1998～2001年度、奨励研究(A)、課題番号[10710165])、②「米国占領下沖縄におけるキリスト教会の自立と共生—1945年～1950年代を中心に—」(2002年～2006年度、基盤研

究(C)、課題番号[14510039])。本研究はこれらの研究を更に深化・発展させたものである。

米軍占領下の琉球列島(奄美群島を除く。以下同じ)のうち、沖縄群島(以下、「沖縄」とのみ表記)についてもキリスト教史に関する先行研究はほとんどない。また、宮古・八重山群島(以下、それぞれ「宮古」「八重山」とのみ表記)については研究が手つかずのままである。この研究停滞の原因としてしばし

ば挙げられるのは「史料の不在」である。報告者は、先に挙げた自らのこれまでの研究でもこの「史料の不在」を克服してきた。本研究はそれらの研究を土台としている。その上で、本研究ではさらなる新たな史料の発見が期待された。

また、報告者のこれまでの研究で、米軍占領下の沖縄島でのキリスト教を巡る政治状況と信徒の行動や教会の形成に影響を与えた社会的構造もある程度明らかになっていた。また、米軍は沖縄を軍事占領統治するに当たりキリスト教を宣撫工作の一環として積極的に利用してきた事実も判明している。それらをふまえた上で、本研究の開始当初には、米軍占領下の沖縄戦後史の文脈にキリスト教会や信徒、宣教師、米軍従軍牧師(チャプレン)等々の思想や行動を位置づけていくことも可能であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、琉球列島のキリスト教について、報告者がこれまで行ってきた研究で不十分であった沖縄の 1940 年代後半と先島(宮古・八重山)について必要な史料を発掘し、それらの徹底した分析を通して歴史の包括的再構成をはかることを目的とした。その目的を達成するために以下の具体的研究課題を設定した。

(1) 琉球列島のキリスト教に関わる諸団体・組織についての調査・研究

- ① 沖縄諮詢会や琉球政府等と沖縄人クリスチャンの関係を戦後沖縄史の文脈に即して歴史的に考察する。
- ② 軍政統治機構(USCAR(United States Civil Administration of the Ryukyu Islands)等)とキリスト教会や宣教師等の関係を解明する。

(2) 1940 年代における琉球列島のキリスト教についての史料収集と研究

- ① 1940 年代の沖縄教会の指導者たちの手記や日記、書簡等の一次史料の発掘
- ② それらの一次史料の保存についてその史料管理者と協議の上で施策を講じる。

(3) 1960 年代の政治状況と琉球列島のキリスト教

- ① ベトナム戦争の激化による米国人宣教師の態度が変化について
- ② キリスト教と地域住民、占領軍との関係について
- ③ 政治的局面での「本土復帰運動」と琉球列島のキリスト者による本土教団への「合同」運動との関連を探る。

- ④ 1966 年のアンガー新高等弁務官就任式における平良修牧師(当時沖縄キリスト教短大学長)の祈祷の背景とその反響について
- ⑤ 「平和をつくる沖縄キリスト者の会」等、1960 年代後半の平和運動・反核反基地闘争の実態につて

(4) 宮古のキリスト教についての包括的調査・研究

- ① 聞き取り調査により、宮古キリスト教会創立の過程の詳細を解明する。
- ② 現在ほとんど解明されていない「キリストの教会」の外国人宣教師の派遣過程・実際の活動状況を解明し、その宣教師と宮古島のキリスト者との軋轢や葛藤の実態・要因を探る。
- ③ 宮古群島の教会の沖縄キリスト教団加入の状況とその意味について、関係者からの聞き取りを通して明らかにする。

(5) 八重山のキリスト教についての包括的調査・研究

- ① 1940 年代における八重山地域独自の教会形成の実態を解明する。
- ② 戦後におけるキリスト教の伝道と土着の宗教との癒着や葛藤を究明する。
- ③ 八重山群島の教会指導者である崎山信邦牧師の研究
- ④ 崎山牧師の指導力と農村伝道センターの実態解明を通して、米国人宣教師の八重山群島での活動の実態を解明する。
- ⑤ 「裏石垣」と呼ばれる地域にある米原という集落には 1950 年代の米軍用地拡張にともなって土地を失った沖縄島・読谷村の住民が集団移住し、その一部が教会を設立した(現在の日本キリスト教団米原伝道所)。その経緯について米原と読谷で聞き取り調査を行いながらその実態に迫る。

(6) 琉球列島における沖縄人キリスト者・教会、米国人宣教師、地域住民、米軍政当局、日本本土教会・教団の諸活動について宗教と政治の相剋の観点から包括的把握をこころみ、あわせてそれらの国家・地域で展開された「キリスト教交流史」を記述する。

3. 研究の方法

本研究の方法は、文献調査と聞き取り調査(インタビュー)の 2 つである。

(1) 文献調査について

- ① 公立図書館：沖縄県公文書館、沖縄県立図書館、同八重山分館、石垣市立図書館、宮古島市立平良図書館、同北分館(旧県立図書館宮古分館)(以上沖縄県内)、国立国会図書館、国立公文書館等
- ② 日本基督教団沖縄教区資料室、沖縄キリスト教学院、日本基督教団富士見町教会等関係機関
- ③ 仲里朝章(首里教会牧師、沖縄キリスト教学院初代学長)や國仲寛一(宮古キリスト教会初代牧師)など当事者たちの手記や書翰、手稿を所蔵する関係者から提供された一次史料の調査

(2) 聞き取り調査について

聞き取り調査については、事前に入念な文献調査を行った上で、関係者に対して面接をして話をうかがうという手法をとった(時間についてはひとり1時間以上)。調査の対象者の居住地、または、かつての活動地域は、沖縄・宮古・八重山の各群島にわたっている(個別の対象者については差し支えない範囲で「4. 研究成果」で紹介する)。

聞き取り調査の記録は音声に記録したものを文字に起こして、必要に応じて調査対象者に確認をした。

(3) 「キリスト教交流史」という方法論を用いた歴史研究

これらの基礎的な調査に基づいて、琉球列島のキリスト教史を総体的に、また、相互に関連したものとしてとらえるために「キリスト教交流史」という方法論を用いた。その要点は以下の2つである。

- ① 琉球列島内の各群島(沖縄・宮古・八重山)のキリスト教の人的教派的交流に留意して、それぞれの地域での教会形成を他地域や米国、日本本土、そして、台湾等との人的な交流の結果として理解する。
- ② 琉球列島においては、地域住民とキリスト教の接触はただ1回のみではない。数度にわたって複数の教派や多様な人物、そして、それらとの関わり方などで、その時々地域社会は異なった性質のキリスト教と接触している。そして、そのたびに受容した地域社会だけではなく、受容されたキリスト教も相互に変化をする。このように、キリスト教の受容・伝道の過程を複数の接触と相互変化を見逃さないように留意しながら研究を進める。

4. 研究成果

はじめに、本研究の進行過程で、上記「2.

研究の目的」について以下の変更が生じている。

① 1950、60年代の研究について

本研究の過程で1940年代後半の当事者の残した手記や日記等が大量に発見され、その整理と分析に時間を要した。そのため1950年代以降の研究・分析については研究開始以前の状態と比較して余り進展していない。

② 戦前と戦後のキリスト教史の関連研究について

戦後沖縄のキリスト教指導者の手記には琉球列島でのプロテスタント伝道の先駆けであるベッテルハイムに関する記述がよく見られる。琉球列島の諸教会の伝道は沖縄戦で一旦断絶し、戦後再開されたと言われてきた。しかし、ベッテルハイムの事蹟に触れ、それを顕彰する行為は、沖縄のキリスト者が断絶した歴史を意識の上で繋ごうとする強い意志の表れではないかと考えられる。本研究の深化の過程でこのような事例に出会い、戦後の伝道の関連で戦前の琉球列島キリスト教史にも踏み込んだ。

以上のことをふまえて、以下に本研究の成果を具体的に記述する。

(1) 「キリスト教交流史」という方法論

本研究では、「キリスト教交流史」という方法論で琉球列島のキリスト教史を分析している。これは、従来の日本キリスト教史の歴史分析の方法を、以下の2つの観点から批判的に見る事から出発している。それは、

- ① 従来の日本キリスト教史は、1859年の横浜・長崎への欧米宣教師の来航にはじまるとしている。これは欧米からのキリスト教が「文明の宗教」としてもたらされたことを明確にしている。ところが、従来の日本キリスト教史は、この1859年の出来事を日本のキリスト教の出発点として「神話化」する余りに、日本におけるキリスト教伝道の歴史を「日本国」という閉じた空間で理解・分析し、日本各地への伝道をその出発点から説明しようとする単線の歴史観に依拠してきた。この「一国伝道史」に立脚する限り、1846年のベッテルハイムによる琉球伝道は日本のキリスト教史家からは無視、あるいは、軽視されている。

- ② このような「一国伝道史」は個別地域での特色ある教会の伝道史の自立性を認めず、常に教派・教団中央の指示・指導の下に行われたという一方的な「地方伝道史観」の陥穽に陥っている。

本研究の「キリスト教交流史」という方法論では、上記の「一国伝道史」やそれに従属する「地方伝道史観」のような硬直した歴史観を克服するために以下のような分析対象

や方法をとっている。

① 伝道の主体としての信徒・地域教会

地域でのキリスト教の宣教を担っているのは宣教師や教派・教団だけではない。そのような担い手は、地域に生活の場を置く信徒でもあり、そこで宣教活動を行っている地域教会の牧師でもある。このような地域でのキリスト教の諸活動について調査し、分析・評価するためには信徒や地域教会を「地域キリスト教史」の主体としてとらえ直さなければならない。

② 歴史的体験の共有と地域形成過程での魂の救済

こうして、信徒の生活の場である地域での教会形成史やキリスト教の活動の歴史を叙述するためには、キリスト教会だけではなく、地域社会全体が共有する歴史的体験のなかにそれらの歴史を位置づける必要がある。そして、それら地域史のなかからキリスト教宣教の歴史の必然性や存在理由を導き出し、地域全体がかかえる「苦」や「悲」に対して教会や信徒がどう取り組んだかについて重点を置いた歴史叙述を目指した。

(2) 琉球列島のキリスト教の分布と概観

琉球列島のキリスト教の概観を考えるために2007年度の『キリスト教年鑑』(キリスト新聞社)をもとに琉球列島各地の教会と信徒の分布についての総括を行った。その結果は、以下の通りである。

《表一I》

地	域	教	会	数	対人口信徒比(%)
沖 縄	中 部	146	43.20%	310	91.72%
	南 部	118	34.91%		
	北 部	44	13.02%		
	離 島	2	0.59%		
宮 古	宮 古	13	3.85%	13	3.85%
	石 垣	14	4.14%	15	4.44%
八 重 山	与 那 国	1	0.30%		
合 計				338	2.82%

これによると、この時点で琉球列島には338の教会があり、約39,000名の信徒がいたことになっている。そして、教会数・信徒数ともその約90%が沖縄島に集中しており、これは現行の人口比と同様である。また、琉球列島全体のキリスト教徒の対人口比は約3%で、日本全体の平均の約3倍になっている。ことに沖縄島の中部地域では3,76%とかなりな高率であることがわかった。

また、沖縄島でも、中部地域の教会数・信徒数とも、県都・那覇市を要して人口でも圧倒する南部地域よりも多い現象が見られた。中部地域に多くの米軍基地が集中する。そして、この中部地域の教会の多くがいわゆる「福音派」の教会(ペンテコステ系等)であること、また、ほとんどの構成員が米国人(米軍関係者)である大規模な「英語教会」もある。このことから、この中部地域で教会数・

信徒数が多い現象については、戦後の米軍占領体制におけるキリスト教の位置と無関係であるとは言えない。

(3) 沖縄島における戦後の教会形成と沖縄キリスト教の原点

本研究における最初のフィールド・スタディとして選んだのは沖縄での戦後の教会形成であった。沖縄島での研究が、本研究で著しく進んだのは以下の2つの要因である。

① 当事者の残した一次史料の発見と1940年代後半の沖縄キリスト教界

本研究開始前の研究でその存在が明らかになっていた仲里朝章の文書群について、本研究では本格的に分析を行った。また、同時期に沖縄キリスト教連盟で活躍したある伝道者の関係者から日記や説教原稿、講演会筆記、著作草稿などの提示を受けた。この史料群については提供者側の意向で現在のところその成果を公にできないが、先の仲里文書と照らし合わせて仲里の日記の記述がほぼ正確であることが判明した。これらの史料群からわかったことは以下の通りである。

- ・ 沖縄キリスト教連盟の創立年月日については1946年2月6日が通説であった。両氏の日記の記述によると、この日に会合が行われたことは確かである。しかし、それ以降約1年間、連盟としての活動は確認できなかった。そして、1947年1月9日に改めて連盟の発会式が行われて、その後は総会が定期的で開催され、理事会は隔月で開催されていることが判明した。以上のことから、「1946年」は占領軍が構想した「宗教連盟」の構想が仏教とキリスト教の対立から頓挫し、キリスト教による組織づくりが確認された日ではないかと推察される。そこで、連盟の実質的な創立は「1947年1月9日」が妥当ではないかと結論づけた。
- ・ 沖縄キリスト教連盟が単なる牧師の親睦・互助団体ではなく、按手札を執行し、定期的に総会・理事会を開催する教派・教団的組織であることが判明した。
- ・ 沖縄キリスト教連盟の総会・理事会での協議内容のアウトラインが明らかになった(両史料で内容がほぼ一致している)。
- ・ また、先述の「ある伝道者」の手稿の裏紙として使われた用紙に「沖縄YMWCA本部会則」「沖縄YMWCA運営内規」を発見した。これにより沖縄におけるYMCAとYWCAの組織は沖縄キリスト教連盟の事業として設立されたことがわかった。また、その活動内容については、講演会や英語講習会など広い活動が行

われており、この組織が沖縄での文化センターの役割を果たしていることがわかった。

② 占領下沖縄におけるキリスト者の思想形成についての研究

先述の仲里朝章文書の分析を通じて 1945 年から 1950 年代前半における沖縄キリスト者の思想形成について論じた。

その前提として、まず、これまで必ずしも明らかになっていなかった仲里朝章の履歴について東京の日本基督教団富士見町教会に残された史料を分析して、仲里の東京時代における教会での活動(本人や家族の受洗年月日と授洗者、長老(教会役員)在任期間等)について確定を行った。これにより仲里と日本基督教会の指導者である植村正久の強いつながりが確認できた。同時に、教会文書のなかに比嘉盛仁をはじめとして多くの沖縄出身者と見られる名前を発見した。これにより、沖縄には「植村人脈」とも言えるネットワークが存在する可能性が生じた。これについては今後の課題である。

そして、当該期の仲里の思想を 1) 沖縄の民族的伝道と篡奪された歴史からの覚醒、2) 「沖縄救済論」と自立のための「協同主義」、3) 平和への希求と軍政への対峙という 3 つの観点から論じた。

なお、この仲里朝章文書については文書を保管されてきた仲里のご子息である仲里朝治氏やご家族と相談の上、仲里ゆかりの沖縄キリスト教大学院図書館に「仲里朝章文庫」として 2010 年から移管することになり、現在同図書館で公開に向けた準備が進んでいる。

③ 米軍占領下の沖縄戦後史への位置づけ

沖縄での戦後のキリスト教会の活動は、米軍の沖縄島上陸直後の 1945 年 4 月末からははじまっていることが確認できた。沖縄県公文書館に所蔵されている米軍による記録フィルムには捕虜収容所とみられるところで兵士、または、民間人が讃美歌を歌う映像が残されている。また、占領軍に所属した日系人兵士の記録によると、同年 5 月初めには民間人捕虜収容所で洗礼式が執行されたという。

また、1945 年 8 月、沖縄では沖縄諮詢会が米軍により組織され、民政の安定と戦後復興にあたったことが知られている。実はこの諮詢会の幹部 15 名の内、3 分の 1 にあたる 5 名(志喜屋孝信(委員長)、當山正堅(文化部長)、安谷屋正量(商工部長)、山城篤男(文教部長)、松岡政保(幹事兼工務部長))が戦前からの教会員、あるいは、一時期沖縄や日本本土や米国内の教会に関わりを持った人物であった。米軍が意図的にクリスチャンや広義の教会関係者を諮詢会幹部に推薦したという確証はないものの、このような沖縄人自治組織の

人員構成はその後の米軍や諮詢会の政策遂行にも影響を及ぼしたといえる。

終戦直後、インフラがほとんど破壊され、経済も機能しなくなっていた沖縄に、日本本土や海外から 10 万人にもものぼる人びとが引き揚げてきた。そして、「戦果アギヤー(「戦果を挙げる」の意。転じて米軍の施設から軍事物資を調達する行為を指す)」や「体当たり」と称される生きるための行為や密貿易・闇市場などが横行する事態となっていた。こうした世相に対して諮詢会は「新沖縄建設」の理想を掲げて奮闘したが、事態は容易に改善できなかった。こうした道徳性や倫理性を強調した運動の中心を担ったのがすでに活発に活動をはじめていたキリスト教会であり、戦前からのクリスチャンであった當山正堅と彼の指導する諮詢会文化部であった。

先述の沖縄キリスト聯盟は、伝道活動の他に、当初は諮詢会(後沖縄民政府)文化部の実働担当部署として米国本土・ハワイからの救援物資の集積と地域住民への配分を担った。しかし、48 年頃からキリスト聯盟内部で戦後復興とキリスト教伝道の優先順位を巡って対立が目立ちはじめた。そして、ほぼ同時期、諮詢会の後継組織である沖縄民政府でも復興を巡る主導権争いが表面化していた。このような対立や争いは、米占領軍との距離感や本土復帰を巡る思惑の違いなどと相まって複雑な様相を呈していた。

本研究では、先述の一次史料の他に当時の諮詢会・民政府幹部の自伝・伝記のなかからキリスト教や教会、信徒に関する記述を詳細に検討することで、キリスト聯盟内での亀裂と民政府の主導権争いとの間に相関関係を発見した。その結果、1945 年以降、数年の間、沖縄ではキリスト教会や信徒が地域形成や政治的な局面で重要な役割を果たしていたことがわかった。

④ ベッテルハイム顕彰行事と沖縄キリスト教の起源

バーナード・J・ベッテルハイム(Bernard Jean Bettelheim)は英国海軍伝道協会より派遣され、1846 年 5 月から 1854 年 7 月までの約 8 年間、那覇に滞在し、琉球王国で伝道活動を行った。その間、数人の受洗者を得たともいわれるが、他に福音書の琉球語訳と牛痘種痘法の伝授などの業績を残している。このベッテルハイムがペリー艦隊とともに米国へ去ってから、確認できるだけで以下の 6 回の顕彰行事が沖縄で大々的に行われている。

i) 1926 年 5 月:「博士ベッテルハイム渡来満八拾年記念伝道講演会」「博士ベッテルハイム渡来満八拾年記念礼拝」(5/2)「ベッテルハイム渡来八十年記念運動」(5/18-20)

ii) 1937 年 5 月:「ベッテルハイム来島 90 周年記念式典」と関連行事。ベッ

テルハイムの孫・ベス・プラット夫人来沖。 ※ 以上、戦前の記念行事

- iii) 1954年9月:「ベッテルハイム百年祭行事」: 1) 頌徳碑修復(琉球政府文教局)、2) ベッテルハイムに関するパンフレット出版、3) 頌徳記念碑除幕式(9/1)、4) 「ベッテルハイム百年記念式典並講演会」(9/1)
- iv) 1966年5月:「ベッテルハイム師沖繩上陸百二十年記念式典」(5/3) ※ 以上、米軍占領下の記念行事
- v) 1996年5月:「ベッテルハイム来沖150年'96おきなわ聖書展」: 聖書展・ミニ講演会・特別講演会・ビデオ上映(5/8-13) ※ 本土復帰後の記念行事

本研究では、これらの諸行事の際に発行されたパンフレット類や新聞記事などからできるだけ当時の様子を再現することを試みた。また、ii)の記念式典に出席したことのある真栄平房敬氏から式の様子だけではなく、準備状況などについて聞き取り調査を行った。そして、そのいずれも顕彰行事でもキリスト教会だけではなく、医師会等の市民組織がそれを後援し、市民も多数参加していたことがわかった。また、占領下で行われたiii)やiv)の行事では、米軍が側面からそれを支援しており、琉球王国滞在中は英国籍であったベッテルハイムが「米国人」として表象されていた事実が判明した。このことから、米軍がベッテルハイムを宣撫工作の一環として利用していたことが推察される。また、これら一連の行事から沖繩人キリスト者の歴史認識を垣間見ることができる。沖繩(特に、沖繩島)のキリスト教は沖繩戦で一時中断・断絶し、戦後新たな出発を迎えたといわれている。しかし、このように戦前から戦後にかけて市民を含めたかたちで行われてきたベッテルハイム顕彰行事を概観すると、断絶した歴史をベッテルハイムの記憶でなんとかつなげていこうとする沖繩キリスト者の歴史認識が確認できた。

⑥ 沖繩地域でのキリスト教の特徴

沖繩地域では沖繩戦の途上から占領開始直後にかけて占領軍が民政に積極的に関与してきた。また、前述の通り1945年4月末には民間人捕虜収容所において米軍の支援によりキリスト教の集会が開催されている。以後、5月には洗礼式が執行され、8月以降は占領行政の中心地であった石川捕虜収容所(「石川市(Ishikawa City)」)でチャプレンや生き残った信徒の指導者たちによってキリスト教の集会が定期的開催されていた。戦後の沖繩のキリスト教界の特徴として、「信徒の教会」として出発したことと、米軍の積極的な支援があげられる。

しかし、こうした米軍の姿勢や教会(指導者)と占領軍の密接なつながりに疑問を抱く者もいた。こうした米軍との距離感の違いで、沖繩人のなかにも、教会のなかにも対立が生じる。そして、このような対立は時代により様相を変えながらも今日まで続いている。占領下においては米軍と直接的間接的に濃厚なつながりを持ち、本土復帰後は日本本土の教団との窓口になった沖繩では、日米両国のキリスト教からの影響を受けながら、40年代の占領開始、50年代の占領体制の固定化、60年代の米軍基地問題の顕在化と復帰運動の沸騰などの政治状況に合わせてキリスト教の伝道や教会の存在意義が問われてきた。

(4) 宮古におけるキリスト教の伝来と展開

① 宮古の地域的特徴とキリスト教の現況

宮古地域の中心である宮古島市(2005年に平良市、宮古郡伊良部町、上野村、城辺町、下地町が合併)から県都・那覇までは約290kmで、八重山の石垣市とは約125kmの距離がある。しかし、この物理的距離は必ずしも心理的距離に比例してはいない。沖繩・宮古・八重山の心理的距離は歴史的に形成されたもので、物理的には近い宮古と八重山の心理的距離は案外離れている。宮古・八重山両地域は「先島(サキマ)」とも呼ばれ、琉球王国時代には人头税などの過酷な税による生活苦(「シマチャビ=孤島苦」)に喘ぎ、首里王府から派遣された役人たちの搾取に悩まされていた。両地域にはこうした共通点があるにもかかわらずその心理的距離が隔たっているのは、「オヤケアカハチの乱」(1500年、琉球王国が八重山に支配下におくために宮古の豪族とともに八重山に侵攻した事件)も遠因であると言われている。

このような歴史的事情もあって宮古では、後述の八重山に比べると首里・那覇志向である。この中央志向の傾向は宮古のエリート層によくみられる。また、宮古は琉球列島のなかでも農地が狭隘でその他の産業も盛んではないので、農民などのなかには八重山地域に入植するケースもある。このような地域の歴史的・地理的事情から宮古人特有の「アララガマ」や「ワイドー」といった「剽悍の気質」が形成された。この他、先述の上昇志向を裏付けするように教育に対して熱心であり、宮古では戦後琉球列島ではじめて「6・3・3」の教育制度が取り入れられた。また、同郷・同族の結束や団結力は非常に高いので、その中で能力の高い個人に対して親類や仲間が積極的に支援し、出郷をうながす傾向もある。

このような地域で伝道をしている教会は、現在、宮古群島の主島・宮古島は11箇所ある(バプテスト(2)、SDA(セブンスデー・アドベンチスト教

会)(1)、聖公会(1)、教団(1)、カリック(2)、イエスの御霊(3)、キリストの教会(1))。信徒数は約1,100名で、対人口比では2.64%にあたる。

② 宮古におけるキリスト教前史

宮古では、戦前、南静園(ハンセン病療養所)において、同所長の家坂幸三郎により「甦生会(よみがえりのかい)」や「八重菱学園」などで聖書講義が行われていた。家坂は戦後沖縄の同様の施設である愛楽園に赴任し、一時期は沖縄キリスト教同盟・沖縄キリスト教会所属の伝道師として伝道にも従事していた。また、それ以前にも、那覇基督教会(日本基督教会、旧日基)の会員であった當山正堅が1920年に宮古郡視学として宮古に赴任して2年間滞在した。しかし、いずれも教会形成にはつながらなかった。

③ 戦後宮古のキリスト教概要と研究方法

「米国陸軍軍政活動概要」(沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史資料編20 軍政活動報告(和訳編)』沖縄県教育委員会、2005年)によると、宮古における教会の設立は以下のように報告されている。「南部琉球では戦後初のキリスト教礼拝が〔1946年=引用者〕12月15日宮古の平良で行われた。儀式には約500人が参列したがこの島のクリスチャンの推定人数は20人を超えない。礼拝は最近帰島した有資格者〔國仲寛一のことか=引用者〕によって毎日曜日に2回行われている。任命司祭はいない」。この「南部琉球」は宮古・八重山地域を指すが(「北部琉球」は奄美地域を指す)、宮古で「戦後初のキリスト教礼拝」が行われたのは事実ではない(既に石垣では八重山基督教会が礼拝を行っていると考えられる)。その後、「1947年1~2月:平均300人の信者が集まって」おり、1948年頃には沖縄キリスト教同盟と連携もはじまっていると報告されている。また「中心を離れた町」での聖書研究集会(南静園での礼拝のことか)も実施され、1948年初頭には伝道範囲の拡大も見られる。

こうした戦後の爆発的とも言える伝道活動の展開の発端になったのは、1946年11月に「LST(米軍の揚陸艦)」で日本本土から引き揚げてきた國仲寛一たちの精力的な伝道と占領軍の支援である。この間の事情について、本研究では、以前に行っていた平良新亮氏(日本キリスト教団宮古島伝道所信徒。同伝道所編『創立40周年記念誌 こいのにあ』(同教会、1987年)を編纂された歴史研究者)に対する聞き取りのほか、以下の人びとにインタビューやメールのやりとりを通じて聞き取りを行い、明らかにした。

- ・ 田崎邦男氏:戦後、日本本土から宮古への引き揚げ中に偶然同じ船の國仲寛一と知り合う。戦後の教会形成の中核

になる。後に那覇に渡るが、1962年の宮古キリスト教会の沖縄キリスト教団への加盟に尽力。精神科医。現在、沖縄島で「医療法人社団 輔仁会 嬉野が丘 サマリヤ人病院」院長。

- ・ 石田順朗氏:宮古島出身(両親は本土出身者)。1947年、宮古島で滞在中のメソジスト教会の宣教師・トムセン(鎮西学院)から受洗。國仲の伝道を支えた。現在、日本福音ルーテル教会隠退牧師。
- ・ 平良 修氏:宮古島出身。1948年、國仲寛一より受洗。石田氏と同様、戦後の國仲による伝道を支えた。現在、日本基督教団沖縄教区無任所牧師。
- ・ 友利愛彦氏:宮古島出身。石田・平良両氏と同様、戦後の國仲による伝道を支えた。現在、浦添市在住。
- ・ 星野 勉氏:石垣島出身。現、日本キリスト教団宮古島伝道所牧師。
- ・ 神山繁實氏:1969年、日本キリスト教団宮古島伝道所牧師として赴任。73年に読谷教会牧師として転任。現在、沖縄キリスト教学院理事長。

また、宮古の教会形成史に関しては教会所蔵の文書がいまのところ発見されていないため、戦後宮古島で発行された以下の新聞(1950年代初頭まで)を閲覧し、関係の記事から分析を行った。参照した新聞は『宮古民友新聞』(1947年5月~)、『宮古タイムス』(1947年7月~)、『みやこ新報』(1947年7月~)、『宮古公論』(1947年7月~)、『新宮古』(1948年4月~)、『宮古婦人新聞』(1949年8月~)、『時事新報』(1950年6月~)、『宮古経済時報』(1950年6月~)、『宮古朝日新聞』(1950年8月~)の9紙である。

これに加えて、國仲寛一の関係者(寛一の弟の子息)から國仲寛一の「日記(1945年~1946年)」、書翰手稿、「國仲寛一先生 民主主義と基督教」(原稿)(これらはいずれも寛一夫人・國仲益子より引き継いだものである)の提供を受け、それを複写し、解説を行った。

④ 國仲寛一の帰郷とキリスト教伝道の開始

國仲寛一については、前半生についてなお不明な点が多い。しかし、関係者の証言や先述の「日記」から帰郷直前には「キリストの教会」系の教会に関係していたと見られる。また、國仲は「早稲田大学英文学科」に在学中、英語の学習目的である教会のバイブルクラスに出席し、米国婦人宣教師の感化を受け、ウィリアム・カニングハム(W. D. Cunningham / 1864~1936)宣教師から洗礼を受けたのではないかと思われるが、これらについては今後更に史料収集と研究をする必要がある。

さて、1946年11月、日本本土より帰郷した國仲寛一は宮古女学校に校長として奉職

するが、同時に占領軍の通訳をしており、市民向けに英語教室も開校していた。報告者が聞き取りを行った石田、平良、友利の3氏はこの時の英語教室(バイブルクラス)に通っていた宮古中学の学生で、それがきっかけでキリスト教と関わりを持つようになる。こうして同年12月15日、宮古キリスト教会が設立される。教会で主として國仲が説教にあたったが、恐らくチャプレンと思われる「軍政府のクロー中尉」の説教を國仲が通訳することもあったという。國仲はこの集会の他、南静園の伝道にも力を入れており、同園では下澤伸夫を中心に100名余りの「信徒」がいたといわれる。また、戦前に南静園に関係していた山内朝隆は1950年前後には宮古群島政府宮古図書館長をしていたが、國仲に導かれて最終的にはバプテストの伝道者となった。

⑤ 國仲寛一死去後の宮古キリスト教会と沖縄キリスト教団への加盟

その後、教会堂を宮古警察の武道場から宮古神社の拝殿へ移し、教勢も拡大して順調に伝道活動が進められていた。しかし、1949年3月6日、健康を害しても薬瓶を片手に精力的に伝道が続けていた國仲寛一が死去する。その後、長老格であった仲宗根勝米や國仲の父親である國仲寛照、寛一夫人の國仲益子らによって教会活動が維持される。仲宗根は戦前に平良町長を務めた町の有力者で、後に伝道師となる。また、國仲の死を前後して平良修氏や石田順朗氏といった若手の信徒や田崎邦男氏などが宮古を離れ、那覇や本土に行った。

そして、時期は不明であるが國仲益子の斡旋で馬橋キリストの教会(東京)から武藤陽一牧師を招聘した。これは、國仲夫妻が戦前東京で関係したキリストの教会系の影響によるものと思われる。こうしたことを背景に1953年には米国からキリストの教会の宣教師・リカーソンが宮古キリスト教会に赴任し、名称が「平良キリストの教会」に変更される。この教会は現在でも存続しており、現在牧師をしている伊志嶺勲氏は当時リカーソンの通訳をしていた。

ところが、1960年代の初め頃にはリカーソン宣教師と信徒の間に洗礼のあり方を巡って問題が生じた。そして、1962年4月1日、旧宮古キリスト教会の会員の大部分が平良キリストの教会を離脱し、國仲寛照の自宅で集会を持つことになった。そして、那覇に在住していた田崎邦男氏の斡旋で62年6月18日に沖縄キリスト教団の加入手続きが行われ、9月23日には同教団に正式加入して沖縄キリスト教団宮古教会として再出発をした。

ところで、1950年代の宮古キリスト教会(実質的には平良キリストの教会)の動向については、本研究でも十分に解明されていな

い。今後は、キリストの教会の関係者に聞き取りをするなどしてその実態解明に努めたいと考えている。

⑥ 宮古地域におけるキリスト教の特徴

先述の通り宮古では那覇志向、本土志向が強い。それらのすべてが「上昇志向」であるとは言いきれないが、宮古キリスト教会においても戦後を支えた特に若手の有力な信徒の多くは宮古を離れて沖縄や本土で活躍をしている。また、宮古キリスト教会では牧師を沖縄や日本本土、八重山から招聘しており、地元出身の牧師ではない。宮古では地域的課題を「中心(沖縄や日本本土)」志向によって解決する傾向がある。それに比べて、戦後復興を足がかりに米軍と関係を持ちながら教会を発展させてきた沖縄や後述の通り地域のミニ・センターとしての文化的な影響力を持っていた八重山の教会に比べて、宮古ではキリスト教が取り組むべき地域的宣教課題が必ずしも明確ではない。こうした点から宮古では他地域に比べるとキリスト教の導入時期が遅れており、その活動も必ずしも活発とはいえない。

(5) 琉球列島のミニ・センターとしての八重山とキリスト教の往来

① 八重山の地域的特徴とキリスト教の現況

八重山地域の中心である石垣市は那覇から約410kmの距離にあり、宮古島市とは約125km離れている。先述の通り八重山と宮古の間には心理的距離があり、宮古が沖縄に心理的に接近している分、一般的に八重山の人びとは宮古からも沖縄(首里・那覇)からも心理的な距離感を感じているといわれている。また、この地は日本の辺境・周縁地域であると同時に、他国の辺境・周縁に最も近いという地理的特徴がある。一概に「周辺・辺境」とは言い難いが、八重山は台湾と歴史的に人的交流が盛んである。典型的島嶼地域である八重山を文化交流や異文化接触という観点で類型化すると、様々な時期に多方面から多様な文化が伝わり、それぞれの文化の担い手がお互いに干渉しあわないように集住地区をつくり、結果として多様な文化が混在するところであると規定できる。一般的に八重山の人びとは「個人主義」と他地域の人びとから指摘されることがあるが、これには上記のような事情が関係しているのであろう。このような八重山の地域的事情に関して、本研究での結論のひとつを先取りすると、八重山に伝えられた多様なキリスト教はそれぞれに仮想的空間としての「キリスト教村」を形成し、一定の役割を付与されている。

そのキリスト教会であるが、現在、八重山群島の主島・石垣島には14の教会がある(バプテスト(1)、SDA(1)、聖公会(1)、教団(4)、カ

リック(3)、イエス之御霊(1)、その他(3))。また、与那国島にはイエス之御霊教会が1つあり、八重山全体では15の教会がある。信徒数は約1,100名で、対人口比では2.08%にあたる。

② 八重山におけるキリスト教前史

八重山には17世紀前半にカトリックの宣教師が来島した記録がある。当時、琉球王国全体はすでに薩摩の実質的な支配下にあり、禁教令が布かれていた。そのような状況下で1624年にルエダ神父が石垣島に来島し、石垣永将に洗礼を授けたといわれている。このことが発覚し、石垣永将とその一族は1635年に火刑に処せられたといわれている(「八重山キリシタン事件」)。現在でも石垣島と与那国島にはそのときの事績を記している石碑等が残っており、石垣永将については八重山地域では巷間よく知られている。

また、近代以降、以下の通り、八重山には様々な地域から人が流入し、定住してきた。

- i) 沖縄島から：旧首里王府役人・家族、糸満漁師(ウミンチュ)等
- ii) 日本本土から：製糖業者と従業員、寄留商人、官員(官吏、測候所、教員、郵便局)
- iii) 宮古から：開拓移民
- iv) 戦後、沖縄島から：米軍に土地を奪われて(「八重山のスピンチュ(読谷村・楚辺人)」)

ことに八重山測候所には本土から一流の知識人が赴任し、岩崎卓爾のように八重山の文化に多大な貢献をする人物も含まれていた。

③ キリスト教(プロテスタント)の伝来

八重山で記録上最も古く確認できる教会の設立は八重山メソジスト基督教会で、1920年代前半より八重山で活動していたようである(『八重山新報』1922.7.11)。しかし、このメソジスト教会はその後継として八重山で伝道を行っておらず、詳細は不明である。

次に八重山に伝道したのは日本基督教会であった。那覇の寄留商人が設立した「古賀商店」(2代目社長の古賀善次は夫婦とも日本基督那覇教会の信徒)の八重山支店勤務となった多田武一(日本基督那覇教会員)は、1927年6月に来島し、那覇教会の芹沢浩牧師(植村正久の弟子)の内命を受けて台湾ですでに洗礼を受けていた信徒と面会した。そして、同年7月3日には花木長平氏宅で伝道集会を開き、1930年7月3日、日本基督教会鎮西中会八重山伝道所が開設された。

これらの出来事と前後して、日本本土や台湾から以下の伝道者が来島し、伝道集会を開催した。

《表一Ⅱ》

来島者	来島者身分・肩書き	自	至	期間
コールス女史 太田牧師	英国宣教師・神戸伝道館本部(日本伝道隊・神戸日本伝道館)	1923年1月30日	?	?
堀内文一郎	日本伝道巡回牧師(日本伝道隊?)	1923年6月18日	?	?

青木幹太	神戸日本伝道館(日本伝道隊)	1926年3月30日	?	?
新垣信一	首里教会牧師(沖縄島より)	1930年6月28日	1930年6月30日	3日間
山口通知	長崎日本基督聖ヶ丘教会(現・長崎高町教会)牧師	1931年3月20日	1931年3月26日	7日間
大澤善助	東洋宣教会日本ホーレス教会福音大使	1932年2月26日	1932年3月2日	5日間
比嘉盛久	「日本基督教会宣教師」(沖縄島より)	1932年6月2日	1932年6月4日	3日間
川崎義敏	福岡日本基督教会牧師	1932年7月21日	1932年7月27日	7日間
川崎義敏	福岡教会牧師・前鎮西中会議長	1933年11月21日	1933年11月27日	7日間

(『八重山新報』『先島朝日新聞』より発表者が作成)

この他に、旧日基からは江朝貞牧師(台湾・屏東教会、沖縄出身者)、藤田治芽牧師(福岡城南教会)、松尾喜代司牧師(熊本教会)、小塩力牧師(佐世保教会)、山田益牧師(小倉教会)、檜崎武三郎(羽犬塚教会)が八重山を訪れ、伝道集会を重ねた。

この時の信徒については名簿が残っているわけではないが、このされた断片的な手記等の記述をたどると八重山郵便局がキリスト教伝道の拠点になっていったことがわかる。先述の花木や、戦後の八重山教会をささえた宮良用善や崎山信邦の妻・秀子は郵便局員であった。また、仙台出身で博物学者でもあった岩崎卓爾が所長を務める八重山測候所も教会をよく支援したといわれている。このように、当時地域のエリートが集まっていた郵便局が拠点となり、本土からの新文化の窓口であった測候所がその活動を承認し、支援することで八重山では文明的なものとしてキリスト教の伝道が受け入れられたと考えられる。

④ 戦火の中の教会と信徒たちの受難

八重山での沖縄戦の特徴は、日本軍による島民・住民の強制移住によるマラリアの罹患とそれによる戦場死であった(「戦争マラリア」)。1942年10月に初代牧師・比嘉盛久の代わりに八重山に赴任した第二代牧師・新垣信一もその犠牲となった。新垣は琉球讚美歌の作者として有名であるが、赴任直後から生活苦の中で伝道を行っていた。そして、新垣は、1945年8月24日、マラリアのために死亡した。また、信徒のなかには台湾へ疎開中に船が米軍機に銃撃され、尖閣諸島魚釣島に漂着し、約50日間飢えにさらされた者もいた。この間に、45年5月頃には英国軍の空襲で八重山支庁の機能が完全に停止し、民政の停滞が決定的となり、マラリアの有病地帯への強制移住と相まって、教会の機能は呈していたのではないかと推察される。

そして、八重山では「終戦」後のあり方も沖縄や宮古とは違っていた。まず、米軍は8月末に日本軍の武装解除のために一旦石垣島に上陸するが、沖縄に引き揚げてしまう。そのため、八重山には武装解除されているが、大量の軍事物資を隠匿したままの1万人近い現地満期兵(現満兵)がそのまま残されていた。そのため、現満兵と地域住民とのトラブルが絶えなかった。これら旧兵士による窃盗等の犯罪行為や元将校たちの軍事物資を

ちらつかせた横暴に業を煮やした若手の地域住民は45年11月頃には「自警団」を結成し、現満兵からの地域防衛をはかった。この若手の「自警団」に壮年の地域の指導者たちが加わって1945年12月15日に八重山自治会が結成される。

⑤ 八重山自治会と戦後八重山教会の再出発

この八重山自治会は同年12月23日に米軍による軍政がはじまるまでのわずか8日間ではあるが、当時事実上の無政府状態にあった八重山地域の自治を目指した「政府」でもあった。そのため、「八重山共和国」と称されることもある。これは、前に述べたとおり、八重山の中央権力からの距離感によって培われてきた「自立性」の表れでもあると評価できる。そして、この自治政府はその後米軍軍政下で八重山民政府へとそのまま移行する。この八重山自治会と民政府の経済政策で重要な役割を果たしたのがキリスト者であった崎山信邦である。

崎山は戦前九州各地の税務署に勤務し、日本基督教会小倉教会で山田益牧師より受洗した。1940年に八重山に帰郷し、引き続いて税務関係の仕事に従事した。徴税人から伝道者への転身は、まさに、新約聖書のマタイを彷彿とさせる。戦後、崎山は先述の自治会・民政府では税務課長として「日本紙幣認印制」と「資産税」の政策を実施し、現満兵による隠匿物資や資産の島外流出を防ぎ、民政府の財政基盤の安定に寄与した。その間も教会で伝道者となった宮良用善を支え、時には講壇に立ちながら精力的に戦後の教会を支えた。同時に、石垣市議会第3代議長を務めるなど政治家としても地域社会で活躍をした。加えて、『自由新報』の社主をつとめるなどジャーナリズムの面でも活躍をした。その後、崎山は立法院(琉球政府の立法機関)議員選挙の敗北などにより政治の世界を断念し、伝道者に専任することを決意した。そして、開拓伝道の結果、平真教会を設立し、1961年5月17日にその初代牧師に就任する。なお、現在日本キリスト教団に属する八重山中央教会と平真教会の牧師は本土出身(農村伝道神学校卒)だが、その配偶者はいずれも崎山の娘である。

さて、この崎山信邦と宮良用善を中心として八重山教会の再建がすすむことになる。まず、1947年8月に沖縄民政府文化部長も兼ねていた當山正堅・沖縄キリスト聯盟理事長が来島し、同聯盟八重山支部が結成された。この「支部」は支部としての活動の実態はなく、八重山の教会は実質的には沖縄の教会ともつながりを持ちながら、自立的に独自の教会形成を進めることになる。

また、この2名の他、戦後の教会を支えたのは以下の人びとである。

- ・ 上原 愛：台湾からの引き揚げ伝道者で、のち、沖縄島に渡りコザ教会・美里教会牧師を務める。
- ・ 伊波南哲・繁子夫妻：戦後、東京からの引き揚げてきた、詩人と伝道者。
- ・ 星野恵夫：農村センター管理者で、子息の勉氏は現在日本キリスト教団宮古島伝道所牧師。

また、戦後は沖縄島や本土から以下の人びとが伝道や移住のために八重山を訪れる。

- ・ 米原伝道所の人びと：米軍に土地を奪われて、1950年代初頭、沖縄島・読谷村より「裏石垣」とよばれるマラリアの有病地帯に移住してきた人びとは八重山教会や宣教師の力を借りて伝道所を設立する。
- ・ ハロルド・リカードとマリオ・バーベリー：八重山の初の宣教師である。1955年の「信仰告白」論争の責任をとる形で相次いで八重山に赴任。バーベリーは農村センターで農業指導に当たる。リカードは、伝道師として米原集落や西表島、小浜島、黒島、鳩間島などの離島伝道も積極的に行った。また、離任後もしばしば八重山を訪れており、八重山の教会員たちには最も印象深い牧師である。
- ・ 室野玄一：元満洲基督教開拓団団長で農村伝道神学校教師を務めていた。1960年6月～1961年3月農村センターの指導にあたる。

この他、1964年3月の「日本キリスト者青年奉仕団オリブの会(現恵泉女学園大学学長・木村利人氏も参加)」など本土の若者達のワークキャンプを受け入れるなど、米軍占領下でも戦前とは違った本土の教会との直接的な交流が見られた。

⑥ 八重山のキリスト教伝道の特徴

戦後、八重山では必ずしも順調にキリスト教伝道が進んだわけではない。1953年頃にはイエスの御霊教会の伝道を巡って地域社会との軋轢が生まれている。当時の新聞を見ると、「世にも恐ろしい女生神様／『神に従え』と暴行脅迫／一皮むけば九万円のサギ女」(『八重山毎日新聞』1953.6.2)、波紋画く御霊教／つくえを叩いて怒号、神がかりな物言い／気の弱いものなら恐ふ症になる／西脇牧師一記者団と一問一答／偽預言者にまどわされた／今後は充分反省したい」(『八重山毎日新聞』1953.6.4)、「御霊教 与那国で悲劇再版／飲料水を汚す位はいを破棄／祈りばかりで働かぬ農民」(『八重山毎日新聞』1953.9.5)等の記事が目につく。しかし、その騒動も同教会の村井ジュン〔屯十二〕監督(1900年から沖縄島・那覇や読谷で伝道を行った村井競(きそう、メソジスト系)の長男)の「イエス御霊教会本質」(『八重山毎日

新聞』1953.9)での弁明により沈静化する。

こうして、地域社会に騒動を持ち込んだり、軋轢を起ししたりするとキリスト教伝道であれ、他の活動であれ、この地域では批判されたり、排除されたりすることもある。しかし、そうでなければ教会やキリスト者もこの地位での一定の役割を与えられ、規模や勢力としては必ずしも大きくはないが、先述の通り仮想敵空間としての「キリスト教集落」が形成され、そこに定住をして地域社会に貢献する仕組みがある。

八重山は周辺の台湾も含めて歴史的に地域のミニ・センターの役割を果たしており、その点で沖縄や本土からより自立性が高い地域形成を行ってきた。これは、教会も同様で、戦前には本土や台湾からの伝道者を沖縄や宮古地域を経由せずに直接受け入れてきた。そして、戦後も同様の影響を受けながらも、沖縄や本土の教団とは一定の距離を置いた教会形成を行ってきた。この「自立性」について、八重山の現役牧師は、

- i) 本土や沖縄の教団とは物理的に距離があり、何かを実行するときにはいちいち「中央」に伺いを立てていたのでは物事が進まないこともあり、「中央」の指示や指導を待たずに物事を実行していく傾向がある。
 - ii) 八重山で独自に事業や施策を実行できるだけの力量を備えた人物、例えば、崎山信邦のような人材がいる。
- の2点を挙げている。

(6) 琉球列島におけるキリスト教交流史の試み

以上のような研究経過を通じて以下のことがわかった。

沖縄のキリスト教は戦前も、戦後(米軍占領下)も、日本のキリスト教の影響下にのみ存在していたわけではなく、それぞれの時代に様々な国家・地域から影響を受けながら、自立的で独自性のある教会を形成してきた。また、それぞれの、また、琉球列島全体の政治や経済、文化等をめぐる地域的な諸課題とあわせてキリスト教会の形成・発展をたどっていくと、それぞれの、また、琉球列島全体の宣教課題が浮かび上がってくる。

本研究では、地域教会や信徒たちの信仰的な営為はそのような宣教課題と日々の生活上対峙し、その解決を迫られているという認識を得ることができた。従来の「一国伝道史」の一環として「地方伝道史観」ではそれらの教会や信徒は統計上の数字に置き換えられ、それらの意思よりも教団中央の意図が重要視されてきた。本研究のよって得られた上記の認識は、これらの歴史観に根本的な反省ととらえ直しを迫るものであると確信している。このような研究は、将来的には日本の植

民地伝道における朝鮮半島や台湾での教会形成、また、同様に米軍の影響下に戦後形成された韓国のキリスト教についても方法論や研究対象の選定、史料の分析や歴史叙述の点で大きなインパクトを与えるのではないかと期待される。

また、本研究で明らかになったように、戦後米軍占領下の沖縄ではキリスト教が地域の政治に直接関与し、積極的な役割を果たした。これは、日本キリスト教史上においてほとんど唯一の事例である。このような米占領軍によるキリスト教を利用した宣撫工作の事例は、実は日本本土でも見られるものである。このようなことから、本研究を更に深化させることによって日本本土や沖縄の占領史についても影響を与えることが可能ではないかと考えている。

今後は、これらの課題に加えて、本研究ではまだまだ不十分であった宮古・八重山のキリスト教史についても基礎的な史料収集を続け、本研究では不明にまま残されている課題を解明したい。また、同じ琉球文化圏にあって、戦後もしばらく米軍の占領下におかれていた奄美地域についても、今後調査を行いたいとかがえている。この点は、すでに、戦前奄美出身の伝道者が多数沖縄伝道活動に従事していた事実をある程度つかんでいる。カトリックの活動が圧倒的である奄美のキリスト教史は本研究の対象をひろげることになる。また、奄美の研究を本研究と接続することで、琉球列島から「南島」へとフィールドを広げ、キリスト教交流史の方法論について新たな知見を加えることが可能ではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 一色哲、軍事占領下における地域形成とキリスト教—1940年代後半の沖縄を事例に一、日本の神学、査読有、第49号、2010、32-52
- ② 一色哲、ベッテルハイムと沖縄、キリスト教史学、査読有、第63集、2010、104-134
- ③ 一色哲、米軍占領下における沖縄キリスト者の思想形成—1940年代後半の仲里朝章を中心に—、東アジア宗教文化研究、査読有、創刊号、2009、63-89
- ④ 一色哲、軍事占領下における軍隊と宗教—沖縄地域社会とキリスト教を事例に一、甲子園大学紀要、査読無、第36号、2009、211-222
- ⑤ 一色哲、日本基督教団における沖縄教会観の起源とその変遷、キリスト教史学、

〔学会発表〕(計 14 件)

- ① 一色哲、「一国伝道史」から「キリスト教交流史」へ―「日本」キリスト教史の対象と空間・再考―、日本基督教学会第 58 回学術大会、2010 年 9 月 17 日
- ② 一色哲、「地の果て」の証人たち―「辺境教会」の形成からみた南島キリスト教史・試論―、キリスト教史学会第 61 回学術大会、2010 年 9 月 11 日
- ③ 一色哲、「一国伝道史」から「キリスト教交流史」へ―沖縄を起点に―、キリスト教史学会西日本部会、2010 年 3 月 6 日
- ④ 一色哲、ベッテルハイムと沖縄、キリスト教史学会第 60 回学術大会、2009 年 11 月 22 日
- ⑤ 一色哲、軍事占領下における地域形成とキリスト教―1940 年代後半の沖縄事例に―、日本基督教学会第 57 回学術大会、2009 年 8 月 29 日
- ⑥ 一色哲、軍事占領下の地域社会とキリスト教―1940 年代後半の沖縄事例に―、東 ASIA 宗教文化学会 第 1 回国際学術大会、2009 年 8 月 16 日
- ⑦ 一色哲、戦後政治のなかの沖縄キリスト聯盟―「新沖縄」建設をめぐる地域社会の対立と葛藤―、「宗教と社会」学会 第 17 回学術大会、2009 年 6 月 6 日
- ⑧ 一色哲、米軍占領体制の発足と沖縄教会の再出発、キリスト教史学会第 59 回学術大会、2008 年 9 月 20 日
- ⑨ 一色哲、米軍占領下に於ける沖縄キリスト者の思想形成―1940 年代後半の仲里朝章を中心に―、日本基督教学会第 56 回学術大会、2008 年 9 月 17 日
- ⑩ 一色哲、ある沖縄人キリスト者の被占領体験と新しい神学の創造―仲里朝章の場合―東アジア宗教文化学会 創立記念国際学術大会、2008 年 8 月 2 日
- ⑪ 一色哲、軍事占領とキリスト教―1940 年代後半の沖縄における教会形成史の研究―、「宗教と社会」学会 第 16 回学術大会、2008 年 6 月 14 日
- ⑫ 一色哲、1940 年代後半の沖縄教会―新たに発見した史料から見―、キリスト教史学会関西部会、2008 年 3 月 8 日
- ⑬ 一色哲、国家、地域、教会―沖縄キリスト教をめぐる 2 つの国家と地域社会―、第 58 回キリスト教史学会大会、2007 年 9 月 15 日
- ⑭ 一色哲、軍事占領下沖縄における“救い”と“癒し”の陥穽―キリスト教、国家、地域社会―、日韓宗教研究 FORUM 第 4 回国際学術大会、2007 年 8 月 20 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://oncolor.cocolog-nifty.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一色 哲 (ISSHIKI AKI)

甲子園大学・人文学部・准教授

研究者番号：70299056

(2) 研究分担者

なし。